

## 結果構文と疑似結果構文についての一考察

—— 概念構造とその拡張 ——

岩 城 令 子

## 0. 現象

英語において (1) にあげるように随意的な要素である二次述語を含む構文が見られる。

(1) The gardener watered the tulips flat.

文末の形容詞 flat は目的語 NP と主述関係を有する。意味的には動詞の表す行為の結果、tulips がどのような状態になったかを表し、このような述語は結果述語 (resultative predicate) と呼ばれる。

また統語形式 NP-V-NP-XP で結果を表す構文には (2) のようなものもある。

- (2) a. The professor talked us into a stupor.  
b. Charlie laughed himself silly/sick/into a stupor.  
c. The rooster crowed the children awake.

(Jackendoff 1990: 226-227)

Yamada (1987) は (1) の結果構文 (Resultative) とは異なる特徴を持つ (2) を疑似結果構文 (Fake Resultative) と呼んでいる。

本稿は二つの構文に関してその類似性と相違点とに基づいて考察を進める。一章では両構文の意味的・統語的特性を示す事実を比較する。二章では結果構文の生成と意味解釈に関する先行研究として、まず Jackendoff(1990) が提案する付加詞規則による分析を概観し、その不備を指摘する。さらに動的文法理論に基づいて、疑似結果構文を結果構文をモデルとして派生的に文法に導入される規則によって生成される拡張構文とする都築(1989)を取り上げて、結果構文、疑似結果構文両構文を統語構造と概念構造において並行性を示す使役構文との相関性に基づいて考察する。

## 1. 結果構文と疑似結果構文の類似性と相違

### 1. 1. 結果構文の特性

#### 1. 1. 1. 結果の述語と描写の述語

(3) の文法性に見られる通り、本来動詞によって下位範疇化されない要素である結果の二次述語の出現は随意的である。

(3) The gardener watered the tulips.

一方(4)の文末の形容詞も随意的な二次述語であるが、(1)のflatとは異なり、行為が行なわれている時の先行詞を記述する描写の述語(descriptive predicate)である。

(4) a. John ate the meat raw.

b. John ate the meat nude.

以下では結果述語構文の特性を描写の述語構文との比較を通して概観する。

## 1. 1. 2. 述語の先行詞

(4) の raw, nude はそれぞれ目的語、主語を先行詞とする。一方、結果の述語の場合は（文に目的語があれば）その先行詞（述語と主述関係をなす NP）は目的語に限られ、主語とはならない。<sup>1</sup> たとえば（1）は結果述語が主語を先行詞とする解釈「tulips に水をやった結果、庭師が地面に伏した」を持たない。

## 1. 1. 3. 動詞の意味制約

結果の述語構文に現われる動詞にはある種の意味制約が課される。目的語を先行詞とする結果の述語を許す動詞は目的語に何らかの作用を及ぼして状態変化を引き起こす他動詞に限られる。

(5) a. He shot her dead.

b. I painted the car red.

(6) a. \*The students discussed the problem solved/clear/out of the present issue.

b. \*The naughty boy knew Mary silly. (都築 1989: 74)

また主語を先行詞とする結果の述語を許す動詞は非対格動詞と呼ばれる自動詞のうち状態変化を表すものに限られる。

(7) a. The ice cream froze solid.

b. Mary blushed red.

<sup>1</sup> 結果の述語構文には動詞が自動詞で目的語を持たないものもあり、その場合先行詞は主語である。

(i) a. The toast burned black.

b. The glass broke into pieces.

以上の事実から、都築（1989）は結果の述語の先行詞は変化を受ける主題項に限られ、目的語を先行詞とする述語と主語を先行詞とする述語が共起できないことを指摘している。

一方描写の述語に関しては動詞に関するこのような制限はない。（4b）で見た通り、主語 NP を先行詞とする解釈も可能であるし、それぞれ主語 NP と目的語 NP を先行詞とする二つの述語の共起も可能である。

(8) John ate the meat raw nude.

#### 1. 1. 4. 述語に対する制約

更に結果の述語には意味的に描写の述語には見られない制約が課される。第一に、動詞の表す行為の結果の状態を表す述語は動詞との間に強い意味関係を持つものに限られる。

(9) a. John froze the ice cream solid/hard/\*soft.

b. Mary blushed red/crimson/purple/\*blue/\*white.

(都築 1989: 75)

(9 a) の容認性の違いは結果の状態を記述する述語として動詞 freeze の含意する意味と整合性を持つもののみが容認されることを示している。

他方、描写の述語については、動詞との間にそのような強い意味関係はなく、述語に対する意味制限は見られない。

(10) a. John ate the meat raw/fully cooked.

b. John came to the party sober/drunken/dressed up/in black.

(都築 1989: 75)

Green(1972: 83–84) や Carrier and Randall (以下 C & R) (1992: 184) は結果構文に現われる動詞の中には結果の述語に個々の選択制限を課すものが存在することが指摘されている。(11)–(12) では、結果の述語として、唯一特定の、あるいは非常に限定された意味を持つ語彙項目以外は、動詞の意味から予測可能な意味であっても容認されないことが示されている。

(11) She shot him dead/\*paranoid. (Green 1972: 83–84)

(12) He drove her crazy/honkers/over the edge/to the blink of lunacy/\*happy/\*to the blink of ecstasy. (C & R 1992: 184)

更に (13) に示されるように、結果の述語は、動詞の表す意味に対して余剰的であってはならない。

(13) \*The gardner watered the tulips wet.

以上の差異から、描写の述語の場合と異なり、結果の述語には動詞との間に強い意味関係が観察される。結果構文においては、目的語 NP に作用を及ぼし状態変化を引き起こす動詞が、その結果としての目的語の状態を顕在化する述語と意味的に密接に結びつき、まとまって一つの概念を表す一種の複合動詞的な意味解釈を受けるといえる。

## 1. 2. 疑似結果構文の特異性

本節では、(2) でみた疑似結果構文を、前節で概観した目的語を先行詞とする結果構文と対照しながら、その特異性を考察する。

一定の統語構造 NP-V-NP-XP には、結果構文の動詞の他、異なる厳密下位範疇化素性を持つ動詞が現われることが指摘されている (Riviere(1982), Sato(1987), Yamada(1987), 都築 (1989), Jackendoff (1990), C & R (1992))。疑似結果構文 (15)–(17) においては動詞の後の NP(postverbal NP)は動詞がとる本来の直接目的語ではない (容認性の判断は Jackendoff による)。(18) は疑似結果構文中の動詞の基体の統語構造を示している (Jackendoff 1990: 226–227)。

- (14) a. The gardener watered the tulips flat. (=1)  
 b. Charlie cooked the food black.
- (15) a. Harry hammered/ pounded the metal flat.  
 b. Bill shaved his razor dull.
- (16) a. Charlie laughed himself silly/sick/into a stupor. (=2 c)  
 b. Veronica sang herself crazy.
- (17) a. ?The rooster crowed the children awake. (=2 c)  
 b. ??John washed the facecloth dirty.
- (18) a. Harry Hammered/pounded ?the metal/on the metal.  
 b. Bill shaved (with his razor).  
 c. Charlie laughed.  
 d. Veronica sang.  
 e. The rooster crowed (??to/at the children).  
 f. *on the desired reading*: John washed (\*the facecloth).  
*possibly*: John washed with the facecloth.

これらの疑似結果構文の中には話者によって容認性の判断に揺れが見られるものもあるが、その意味解釈において、目的語 NP (動詞の後の NP)

が動詞が表す主語 NP の行為によって作用を受け、状態変化を被ることを表すという点で結果構文と並行性を示す。しかし結果構文では結果を表す述語は随意的であったのに対し、疑似結果構文から結果を表す述語を省略した文は非文法的である。また疑似結果構文から目的語を省略した場合も非文となる。

- (19) a. \*Bill shaved his razor.  
 b. \*Charlie laughed himself.  
 c. \*The rooster crowed the children.
- (20) a. \*Bill shaved dull.  
 b. \*Charlie laughed silly.  
 c. \*The rooster crowed awake.

疑似結果構文に現われる動詞と結果構文に現われる動詞とはその統語的性質のみならず意味に関しても相違が見られる。1.1.3. でみた通り、結果構文にはその動詞にさまざまな制約が課せられるが、疑似結果構文の場合は動詞に対する制限はゆるい。

C & R (1992) は (21 a) は文末の述語 *raw* に関して結果述語の解釈と描写述語の解釈の二通りの曖昧性があるのに対して、(21b)の述語には描写の読みしかないとしている。

- (21) a. The lion chewed the knuckles of the hunter raw.  
 b. The lion ate the knuckles of the hunter raw.

(C & R 1992: 206–207)

この相違は、動詞 *eat* の場合は他動詞であっても、「目的語に状態変化を引き起こす」という動詞の意味制約にあてはまらないことによる。

一方疑似結果構文の場合には、上記の制約は観察されない。

(22) a. Herman ate the cupboard bare.

(Levin and Rapoport 1988: 276)

b. Bill ate his belly full.

(Sato 1987: 92)

随意的に目的語をとる動詞 eat を含む (22) における動詞の直後の NP は eat がとる直接目的語の意味選択に反しており、食べる対象としてではなく、動詞の表す行為により引き起こされる事態の主体として解釈されるが、この場合、動詞との意味関係は間接的である。<sup>2</sup> また本来目的語をとらない自動詞を含む (23) においては、動詞の表す「行為」と「結果」の間の意味関係は更に間接的といえる。

(23) a. They'd talk the bark off a tree.

(Sato 1987: 92)

b. We sat around and talked the dusk into night.

c. We must think peace into existence.

(b, c ともに Rivière 1982: 686, 688)

更に結果構文と疑似結果構文とは語彙的操作によって派生される構造である形容詞的受動形や動詞との複合語に関して、その容認性に違いがあるとする指摘がある。<sup>3</sup>

<sup>2</sup>(22 a, b) は「たくさん食べた」結果「食料棚が空に」「お腹がいっぱいに」なると解釈される。この語彙的には保証されない意味「大いに…する」は、VP 全体の解釈において動詞本来の目的語ではない NP が何らかの影響を受けて状態が変化するという使役的意味と共に誤用論的に付加されると考えられる。

<sup>3</sup>後述するが、この容認性の判断については揺れが見られ、(24), (25) の間に決定的差異を認めない話者もいる (Jackendoff 1990: 236 参照)。



- (24) a. the spun-dry sheets  
 b. the smashed-open safe
- (25) a. \*the run-threadbare Nikes  
 b. \*the crowed-awake children
- (26) a. short-cropped hair  
 b. a clean-shaven face
- (27) a. \*thin-run pavement  
 b. \*sick-laughed lady (C & R 1992: 196)

## 2. 結果構文・疑似結果構文の生成と動詞の意味拡張

### 2. 1. Jackendoff (1990) の分析

Jackendoff(1990) は結果構文と疑似結果構文の両構文について、動詞の後の NP-XP を共に動詞が本来下位範疇化しない要素であるとし、その付加詞 (adjunct) を含む VP の統語構造と概念構造との対応規則 (correspondence rule) である付加詞規則を設定する分析を提案している。

Jackendoff が (28) のパラフレーズとして挙げる (29) においては、(28) 中の動詞は意味的・統語的主要部ではなく、修飾語句に引き下げられている。このような意味解釈に基づき、Jackendoff は結果を表す構文の意味解釈について (30) の付加詞規則を設定する。

- (28) a. The gardener watered the tulips flat. (=1, 14 a)  
 b. Harry hammered/pounded the metal flat. (=15 a)  
 c. Charlie laughed himself silly/sick/into a stupor.  
 (=2 b, 16 a)  
 d. ?The rooster crowed the children awake. (=2 c, 17 a)
- (29) a. The gardener made the tulips flat by watering them.  
 b. Harry made the metal flat by pounding/hammering (on) it.

c. Charlie made himself silly/sick by laughing.

d. The rooster got the children awake by crowing.

(Jackendoff 1990: 228)

(30) AP Resultative Adjunct

[<sub>VP</sub> V<sub>h</sub> NP AP] may correspond to

$$\left[ \begin{array}{l} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{INCH } [\text{BE}_{\text{Ident}} ([\beta], [\text{Property } ]_A)]) \\ \text{AFF}^- ([ ]^{\alpha}, [\{\alpha\}]^{\beta}) \\ \text{[BY [AFF}^- ([\alpha], \{\beta\})]_h} \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1990: 282)

一定の統語構造 V-NP-AP を持つ VP に対する (30) の適用の結果、VP の概念構造には、主要関数として使役を表す CAUSE が表示され、構文の目的語と結果を表す述語とは上位節中の概念項に結合される。また構文に現われる動詞は手段を表す下位の概念関数の構成素に写像される。<sup>4</sup>すなわち、VP は全体として使役の意味を持つ、一種の構造的イディオムとして解釈されるのである。(31)–(33) はそれぞれ文とその概念構造を示している。

(31) The gardener watered the tulips flat.

$$\left[ \begin{array}{l} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{INCH } [\text{BE } ([\beta], [\text{AT } [\text{FLAT}]])]]) \\ \text{AFF}^- ([\text{GARDENER}]^{\alpha}, [\text{TULIPS}]^{\beta}) \\ \text{[BY [CAUSE } ([\gamma], [\text{INCH } [\text{BE } ([\text{WATER}], [\text{ON}_d [\delta]])])]_h} \\ \quad \text{[AFF}^- ([\alpha], [\beta]) \end{array} \right]$$

<sup>4</sup> Jackendoff の主張では、CAUSE は動詞に対応しているのではなく、統語構造上の付加詞 NP-AP によって概念構造上に表示される。符号  $\alpha, \beta$  は従属節の概念項が上位節の概念項によって束縛されることを示す。

(32) The rooster crowed the children awake.

$$\left[ \begin{array}{l} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{INCH } [\text{BE}_{\text{Ident}} ([\beta], [\text{AT } [\text{AWAKE}]])]]) \\ \text{AFF}^- ([\text{ROOSTER}]^\alpha, [\text{CHILDREN}]^\beta) \\ \\ [\text{BY } [\text{CROW } ([\gamma]) \\ \text{AFF}^- ([\alpha]^\gamma, [\beta])] ] \end{array} \right]$$

(33) Charlie laughed himself silly.

$$\left[ \begin{array}{l} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{INCH } [\text{BE } ([\beta], [\text{AT } [\text{SILLY}])]]) \\ \text{AFF}^- ([\text{CHARLIE}]^\alpha, [\alpha]^\beta) \\ \\ [\text{BY } [\text{LAUGH } ([\gamma]) \\ \text{AFF}^- ([\alpha]^\gamma, \quad ) ] \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1990: 232–233)

以上が Jackendoff の分析の概略であるが、統語的・意味的に相違点のある結果構文と疑似結果構文とを同列に扱う点に関して、問題点が指摘できると思われる。

第一に上記の分析では VP 内の動詞の本来の項構造に関する区別をせず、他動詞の場合であっても動詞の後の NP は統語上の付加詞として分析される。

また Jackendoff では疑似結果構文の特異性を示す話者による容認性の判断の揺れに十分な説明が与えられない。

Jackendoff は (30) で概念構造上の主要関数 CAUSE と従属関数の行為層 (action tier) に項として行為者 (Actor) と被動者 (Patient) をとる AFF<sup>-</sup> を設定することで、規則が適用される VP の動詞に対する意味制約を示し、結果を表す構文の容認性は目的語の被動者性と相関関係にあると主張する。すなわち Jackendoff の判断による (34)–(35) の容認性の違いは、目的語の被動者性のテストとなる疑似分裂文の容認性の違いと並

行的であるとされる。<sup>5</sup>

- (34) a. Harry hammered/ pounded the metal flat.  
 b. The professor talked us into a stupor.  
 c. Bill shaved his razor dull.
- (35) a. ?the rooster crowed the children awake.  
 b. ??The boxers fought their coaches into an anxious state.  
 c. ??John washed the facecloth dirty.
- (36) a. What Harry did to the metal was hammer/pound (on) it.  
 b. What the professor did to us was talk to us.  
 c. What Bill did to his razor was shave with it.
- (37) a. ??What the rooster did to the children was crow.  
 b. ??What the boxers did to their coaches was fight.  
 c. ?What John did to the facecloth was wash with it.

(Jackendoff 1990: 226–230)

しかしながら容認性に差がある (34 c) と (35 c) におけるそれぞれの動詞と目的語との間の意味関係は「…を用いて行為を行なう」という点で等しく、通常の文で必要とされる前置詞が *with* である点も共通である。したがって (34 c) と (35 c) の *his razor* と *the facecloth* の被動者性の違いに関して、明確な差異は認められず、(36 c) と (37 c) の容認性の判断も決定的なものとは思われない。更に、上記の分析は、Jackendoff 自身も認めている通り、再帰代名詞を目的語とする (38) については全く

<sup>5</sup> Jackendoff は (34) の目的語の被動者性について、語用論的に与えられた談話的被動者 (*discourse patient*) とし、動詞が与える文法的被動者 (*grammatical patient*) と区別している。

当てはまらない。<sup>6</sup>

(38) Charlie laughed himself silly. (=16 a)

Veronica sang herself crazy. (=16 b)

(39) \*What Charlie did to himself was laugh.

\*What Veronica did to herself was sing.

(Jackendoff 1990: 231)

第三に付加詞規則では、結果構文の動詞と述語との間に要求される密接な意味関係が規定されない。

付加詞規則 (30) の適用による文末の AP が結合される上位節の概念項には、概念範疇 Property が指定されている。しかしこの概念項に対して、従属節の構成要素である動詞との依存関係に基づく意味制約を指定するためには、更に何らかの規定が必要となる。<sup>7</sup>

<sup>6</sup> Jackendoff は (30) の表記上に括弧を用いて、再帰代名詞を目的語とする VP に適用される規則の形式を他と区別することで、目的語の被動者性に関する動詞の意味制約は例外的に課されないとする (目的語が再帰代名詞の場合は (i a)、それ以外は (i b) である)。

- (i)  $[_{vp} V_h NP AP]$  may correspond to
- |    |                                                                                                  |   |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| a. | CAUSE ([ $\alpha$ ], [INCH [BE <sub>Ident</sub> ([ $\beta$ ], [AT [Property ] <sub>A</sub> ]])]) | ] |
|    | AFF <sup>-</sup> ([ ] <sub>A</sub> <sup>a</sup> , [ ] <sub>A</sub> <sup>b</sup> )                |   |
|    | [BY [AFF <sup>-</sup> ([ $\alpha$ ], [ $\beta$ ])] <sub>h</sub> ]                                |   |
| b. | CAUSE ([ $\alpha$ ], [INCH [BE <sub>Ident</sub> ([ $\beta$ ], [AT [Property ] <sub>A</sub> ]])]) | ] |
|    | AFF <sup>-</sup> ([ ] <sub>A</sub> <sup>a</sup> , [ ] <sub>A</sub> <sup>b</sup> )                |   |
|    | [BY [AFF <sup>-</sup> ([ $\alpha$ ], )] <sub>h</sub> ]                                           |   |

<sup>7</sup> 動詞がその項に対し、意味的に特定の要素を要求する場合、その条件が動詞の LCS に記載される。動詞 drink の場合、主題 (Theme) には意味的条件 LIQUID が課されている。

- (i)  $\left[ \begin{array}{l} \text{drink} \\ \text{v} \\ \text{---} \langle \text{NP} \rangle \\ \text{[Event CAUSE ([Thing], [Event GO ([Thing LIQUID],} \\ \text{[TO ([Place IN ([Thing MOUTH OF ([Thing])])])])])}] \end{array} \right]$

しかし付加詞規則 (30) の規定では、述語が結合される上位節の概念項に、概念範疇 Property 以外に、動詞本来の意味内容と関連して更に厳しい意味的条件を設定できない。

## 2. 2. 文法の拡張現象

都築(1989)は、Kajita(1977)で提唱された動的文法理論の枠組みに基づき、疑似結果構文を結果構文をモデルとして文法に導入される規則により生成される派生的構文とする分析が提案されている。

都築によれば、動詞の間に強い語彙的依存関係を有する結果述語は、動詞によって選択される項と分析される。即ち状態変化を表す他動詞は、結果を表す要素を着点項として随意的に選択する。また辞書 (lexicon) に規定された結果構文の動詞の下位範疇化の枠組みは (40) であり、この内 (40 b) が「ある対象がある状態に変化する」という意味と結びつくものとされる。

(40) a. [+ \_\_\_\_ NP]

b. [+ \_\_\_\_ NP AP/PP] (都築 1989: 69)

また都築の分析では基底構造で補部を選択しない自動詞が現われる疑似結果構文は、結果構文をモデルとして動詞の下位範疇化の枠組みが再構造化される文法の拡張現象によって生成される構文であり、より派生的性質を持つとしている。疑似結果構文の動詞は結果構文の統語構造をモデルとすることで基底での項構造に反して、統語的には NP-XP との共起が可能になり、意味的には VP 全体に対し「自動詞の表す行為の結果、構文の目的語が述語の表す状態に変化する」という解釈が与えられるのである。

都築の主張に従えば、疑似結果構文の持つ結果構文との類似性と相違点との説明が可能となる。疑似結果構文は構文の目的語あるいは疑似結果述語のいずれが落とされた場合にも非文となるが、この非文法性は動詞に適用される再構造化規則の適用条件であるモデル構文の形式との共通性が崩れることから自然な説明が与えられる。また派生的構文である疑似結果構文の場合、動詞の表す行為が目的語に何らかの作用を及ぼすという解釈は、

結果構文とは異なり、動詞本来の意味によってではなく、構造上明確に保証されている。このため疑似結果構文では動詞と結果との意味関係がかなり間接的なものであっても容認されると思われる。更に都築は疑似結果構文が疑問化、受動化などの操作を受けると容認性が下がることを指摘し、このように操作を受けにくい性質も、派生的構文が典型的に示す特性であるとしている。<sup>8</sup>

- (41) a. ?Who did the professor talk into a stupor?  
 b. ??What did Bill shave dull?  
 c. ?We were talked into a stupor by the professor.  
 d. ??His razor was shaved dull. (都築 1989: 72)

同一の統語構造 NP-V-NP-XP で結果を表す構文を、基本的構文とそれをモデルとして生成される派生的構文とに区別する都築の分析は、結

<sup>8</sup> 話者によっては、これらの操作の適用後の容認性について、結果の結果構文と疑似結果構文との間に差を認めない場合もある。C&R(1992) は基本の形で結果構文、疑似結果構文共に容認し、更に両構文とも受動化可能とする (C&R 1992: 196)。

- (i) a. The grapes were stomped flat (by French winemakers).  
 The sheets were spun dry, and nearly ruined, (by that industrial-grade dryer).  
 The safe was smashed open (by the burglars).  
 The socks were scrubbed clean (by the laundry attendant).  
 b. These soles have been danced thin (by a professional hooper).  
 By the end of the marathon, his Nikes had been run threadbare.  
 Every morning on the farm, the children are crowed awake (by the roosters).  
 By the end of the lecture, the audience had been talked unconscious (by the boring professor).

また長距離抽出 (long-distance extraction) の結果についても、両構文の違いを認めていない (C&R 1992: 204)。

- (ii) a. ?Which metal do you wonder who hammered flat?  
 ?Which metal do you wonder whether to hammer flat?  
 b. ?Which sneakers do you wonder who ran threadbare?  
 ?Which sneakers do you wonder whether to run threadbare?

果構文と疑似結果構文に関する事実に対してより自然な説明を与えることが可能であると思われる。しかしながら、その主張に反する事実レベルでの指摘も存在する。

都築は文法の拡張のモデルとなる結果構文の意味と形式は強く確立しているという前提のもと、結果述語は結果構文の動詞の語彙記載項 (lexical entry) において統語的にも意味的にも保証されているとする。しかしながら Jackendoff (1990) では形容詞的受動形について、(24) に類する例の容認性は低く、(42) の場合は非文法的であるとされる。

- (42) a. \*washed-clean clothes  
 b. \*washed-flat tulips  
 c. \*hammered-round wire  
 d. \*cooked-black food (Jackendoff 1990:236)

このように結果構文についても話者によって容認性の揺れが見られるという事実から、状態変化を表す他動詞の場合であっても結果構文の動詞として派生的なものがあり、その解釈は辞書外の規則によって与えられるとする分析の可能性も残されていると思われる。<sup>9</sup>

<sup>9</sup> Jackendoff (1990) は語彙的に使役的起動相の意味を持つ動詞 (causative inchoative) と付加詞規則によって VP で結果を表す解釈を与えられる動詞とを区別し、前者の中には結果述語として AP, PP の他 NP を許可するものもあるとする。

(i) a. Bill painted the house a disgusting shade of red.  
 b. MIT made me a linguist.

また (ii) の特定の目的語と述語のみを許すものは、VP として語彙化されたイデオムとしている。

(ii) a. work one's fingers to the bone  
 b. cry one's eyes red  
 c. eat someone out of house and home  
 d. drink someone under the table



### 3. 結 び

結果構文と疑似結果構文の類似性には、両構文ともに持つ統語的使役構文との統語構造、概念構造上の相関性が関与していると思われる。

「行為の結果、対象がある状態になる」という使役の意味の概念を表す典型的構文は、統語的使役動詞 *make*, *get* がとる NP-V-NP-XP である。結果構文の他動詞は目的語に作用を及ぼすという意味内容から使役的意味を潜在的に持ち、行為の結果は動詞が使役構文の典型的構文に現われることで文末の述語として顕在化する。その際、動詞と結果の述語は一種の複合動詞としてまとまった意味概念を持つ。一方より派生的構文である疑似結果構文はその生成に際し結果構文をモデルとするが、モデル構文の特徴をすべて備えている訳ではなく、両者の間には相違点も存在する。猶、疑似結果構文の NP-XP が構造上保証されている位置は、今後の課題となると思われる。

### 参 考 文 献

- Carrier, J. and Randall, J.H. 1992. "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *LI* 23, 173-234.
- Dowty, D. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*, Dordrecht: Reidel.
- Green, G. 1972. "Some Observations on the Syntax and Semantics of Instrumental Verbs". *CLS* 8. 83-95.
- 稲田俊明 1988. 『補文の構造』 大修館書店.
- Jackendoff, R.S. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- . 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Kajita, M. 1977. "Towards a Dynamic Model of Syntax." *SEL* 5.
- Levin, B. and Rapoport, T.R. 1988. "Lexical Subordination," *CLS* 24, 275-289.
- 中島平三 1989. 「主述関係」の諸問題『英語青年』135巻8号 10-12, 9号 27-29.
- 奥野忠徳 1989. 『変形文法による英語の分析』 開拓社.

- Rapoport, T.R. 1991. "Adjunct Predicate Licensing and D-structure," in Susan D. Rothstein (ed.) *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, New York: Academic Press.
- , 1993. "Verbs in Depictives and Resultatives," in Pustejovsky, J.(ed.) *Semantics and the Lexicon*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Rivière, C. 1982. "Objectional Objects," *LI* 13, 685–689.
- Sato, Hiroaki. 1987. "Resultative Attributes and GB Principles," *English Linguistics* 4, 91–106.
- 荘口美樹子 1992. 「結果を表す構文に関する一考察」*九大英文学* 34. 155–171.
- Talmy, L. 1985. "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexicon Form," in Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description* 3, Cambridge: Cambridge University Press.
- 都築雅子 1989. 「結果の二次的述語とその拡張」『*英語教育*』3月号 73–74, 4月号 68–72.
- Yamada, Yoshihiro. 1987. "Two Types of Resultative Construction," *English Linguistics* 4, 73–90.

1994. 1. 31. 受理